

追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木商工会議所商業部会 共同調査

2024年度 茨木フェスティバル 「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分析

葉山 幹恭・宮崎 崇将・村上 喜郁
追手門学院大学ベンチャービジネス研究所

目次

はじめに

アンケート当日の実施状況

1. 回答者の基本属性
2. 【質問1】あなたが普段よく利用する鉄道（モノレールを含む）の最寄り駅はどこですか？（複数回答可）
3. 【質問2】最寄り駅を利用する目的は何ですか？（複数回答可）
4. 【質問3】よく利用する駅周辺に不足していると思う施設・お店は何ですか？（複数回答可）
5. 【質問4】茨木市内での移動に利用・使用する交通手段を教えてください。（複数回答可）
6. 【質問5】昨年11月26日にオープンした「おにクル」を利用したことはありますか？利用したことがある場合はその頻度を教えてください。（複数回答可）
7. 【質問6】「おにクル」を利用した方にお尋ねします。来られる際の交通手段を教えてください。（複数回答可）
8. 【質問7】「おにクル」を利用した方にお尋ねします。「おにクル」に不足していると思う施設・サービスはありますか？（複数回答可）
9. 【質問8】今年の4月23日に一部オープンした安威川ダム周辺に整備中の公園「ダムパークいばきた」を知っていますか？知っている場合は何で知りましたか？（複数回答可）
10. 【質問9】「ダムパークいばきた」では各種イベントが可能なステージなどがある広場エリアがオープンしていますが、どんなイベントを期待しますか？（複数回答可）
11. 【質問10】「ダムパークいばきた」には今後、次の施設ができる予定です。どれを利用したいですか？（複数回答可）

12. 【質問11】その他「茨木の交通と暮らし」についてご意見があればご記入ください。

おわりに

はじめに

本アンケート調査は、茨木市の市民祭りである「茨木フェスティバル」における市民の方々への意識調査を通じて、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を目的としている。具体的には、2024年7月27日（土）・28日（日）に開催された「第50回 茨木フェスティバル」に茨木商工会議所 商業部会と共同して出展し、市民に向けた「茨木の交通と暮らし」と題したアンケート調査を行い、集計と分析を行うことで、茨木市の商業発展、安心・安全なまちづくりに資する基礎資料の作成を試みている。また、アンケートの実施に関しては、その収集と集計の効率化を鑑み、新型コロナ禍で導入したスマートフォンやタブレットを活用した電子的な形を引き続き採用した。加えて、本年度は昨年度に引き続き、2023年に開館した茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」に関する利用状況等、ならびに2024年4月24日に一部先行オープンした「ダムパークいばきた」に関するアンケートも実施している。さらに、本調査体制となった2022年度からの結果の年度間比較も部分的に行った。

アンケート当日の実施状況

茨木フェスティバルに茨木商工会議所と共同で2日間ブースを出展し、そこで茨木市民アンケートに取り組んだ（写真1）。商工会議所商業部会運営委員の田峰氏と宮崎の監督のもと、追手門学院大学経営学部宮崎ゼミの学生が1日約8名が参加しアンケート回収に取り組んだ。アンケートの回答を増やすために、協力していただいた方の家族等にお菓子すくいをしてもらっ



写真1



写真2

た（写真2）。学生は、列の整理とアンケート回答のサポート、お菓子すくいに役割を分担した。

今年度もアンケートの回答にはGoogleフォームを活用した。事前に商工会議所の中野拓二氏と意見交換を行いアンケート項目を整理し、Googleフォームを使って回答フォームを作成した。GoogleフォームへのリンクをQRコードにして印刷し、参加者のスマートフォンなどで読み取ってもらい回答してもらった（写真3）。また、スマートフォンを持っていない子どもや、操

作に慣れていないことが想定される高齢者の方を念頭に、ベンチャービジネス研究所からタブレットを3台借用して、学生がサポートして入力するようにした（写真4）。

結果的に、多くの参加者に協力していただくことができ、両日とも18時30分頃には目標を達成し、1,000件を目標にしていたが2日間で1,058件の回答が集まった。



写真3



写真4

1. 回答者の基本属性

アンケートの回収数は1,058件で、そのうち無効回答としたものが3件あったため、有効回答数は1,055件であった。無効回答としたものについては、同じ時間帯に数分の間にすべての質問に同じ回答をしているものが4件あったため、1件のみを有効とし、残りの3件を無効とした。

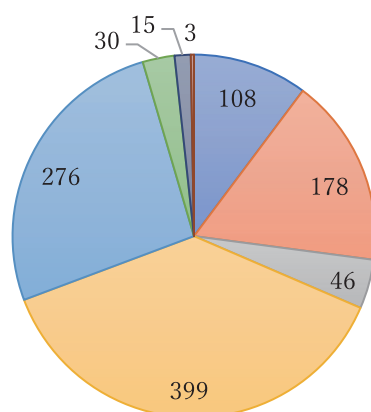
Googleフォームのアンケートには、同じ回答者から複数回の提出ができないように制限する機能がある。この機能を利用すれば、今回のような問題を避けることができるが、アンケートは回答者個人が所有するスマートフォンのほか、ベンチャービジネス研究所が用意したタブレット端末を使用して回答してもらっている。提出回数の制限を利用すると、タブレットを複数

人で使用する運用が難しくなるため、今後のアンケートでは、回答後の送信について声掛けを行うなどの対応をしていきたい。

1-1. 年齢分布

アンケート回答者の年齢は30代が最も多く、399人で全体の37.8%を占めた。次いで多いのが40代で276人(26.2%)、以下は10代が178人(16.9%)、9歳以下が

108人(10.2%)と続いた(図1-1.1)。図1-1.2のように、アンケート回答者の年齢分布は一昨年とほぼ同じ構成になっている。昨年は10代と9歳以下の回答者が増加したが、これは新型コロナウイルスが第5類に引き下げられたことで子どもの外出が増えたためと考えられる。しかし、今回の結果を見ると、昨年の変化は一過性のものであった可能性がある。



■ 9歳以下 ■ 10歳台 ■ 20歳台 ■ 30歳台 ■ 40歳台 ■ 50歳台 ■ 60歳台 ■ 70歳以上

図1-1.1 アンケート回答者の年齢 (N=1,055)

出典：アンケート結果より筆者作成。

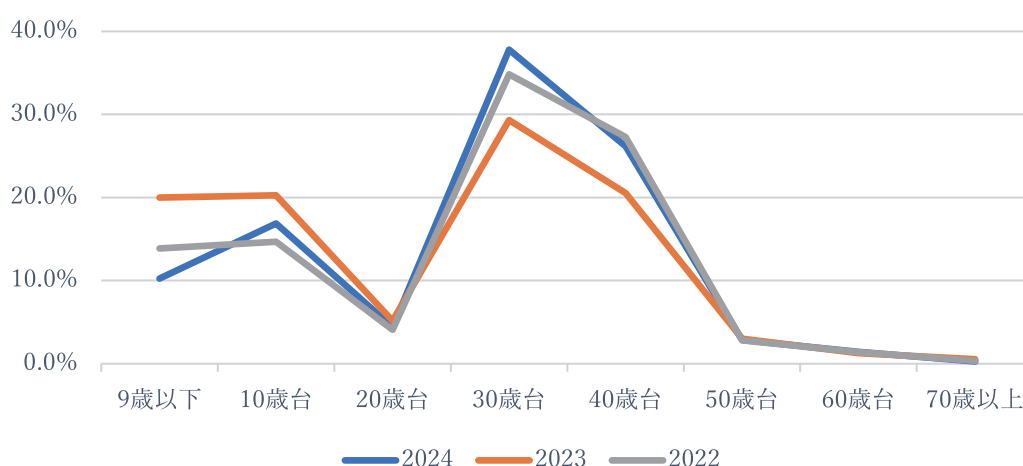


図1-1.2 アンケート回答者の年齢 (一昨年、昨年との比較)

出典：アンケート結果より筆者作成。

1-2. 性別分布

アンケート回答者の性別は、女性が62.2%、男性が36.4%と女性の割合が高かった（表1）。この傾向は図1-2.1のように、昨年・一昨年と続いて現れている。また、図1-2.2では、茨木市全体の年代ごとの割合と

比較しているが、アンケート回答者には大きな偏りが見られる。前述の年齢分布と合わせて考えると、30代・40代の母親が子どもと来場している可能性が高いと考えられる。

表1 アンケート回答者の男女比

女	男	回答しない
656人	384人	15人
62.2%	36.4%	1.4%

出典：アンケート結果より筆者作成。

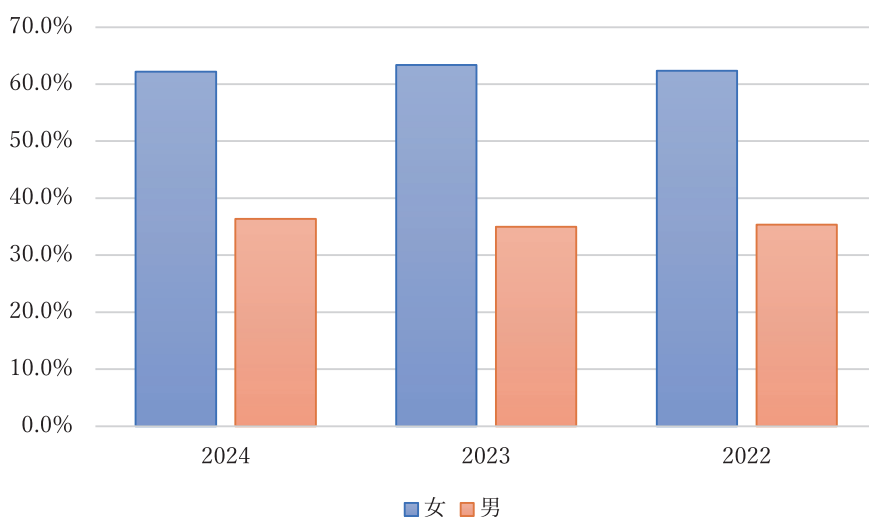


図1-2.1

出典：アンケート結果より筆者作成。

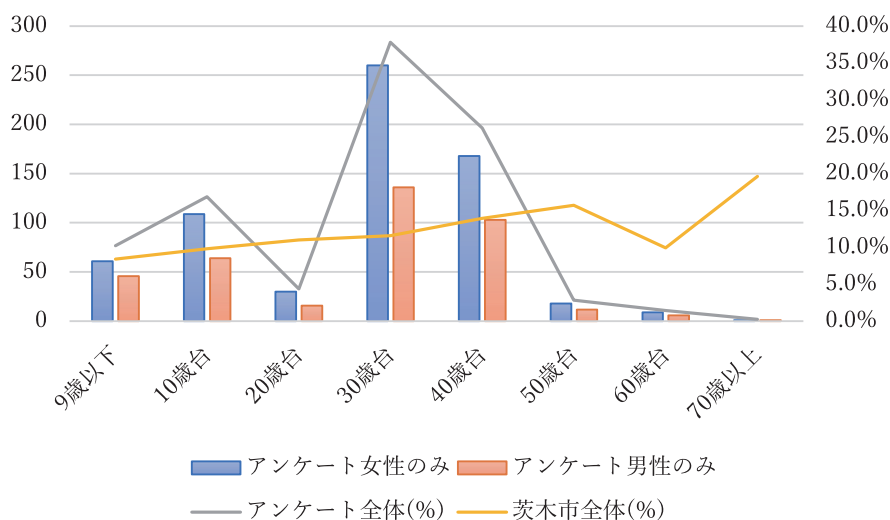


図1-2.2 年齢と性別ごとのアンケート回答者数と茨木市全体の比較

出典：アンケート結果、茨木市「1歳階級別人口（住民基本台帳）」より筆者作成。

1-3. 居住地分布

居住地域の回答では、茨木市が84.1%、市外が15.3%という結果であった。茨木市の回答者を地域別（表4）で見ると、図1-3のように、茨木フェスティバルの会場に近い中央部が22.1%と最も高い割合を占めている。一方で、北部・南部地域については、茨木市の地域別人口割合と比較するとアンケート回答者が少な

かった。

次に、市外のアンケート回答者を見ると、高槻市と吹田市がともに23.0%で、次に多いのが大阪市で14.3%であった（表5）。市外の回答者は、これまでと同様に茨木市に近い地域が多い傾向にあるが、昨年と比較すると市外の回答者の割合は5.6ポイント減少（昨年は20.9%）している。

表2

	茨木市	市外	不明／回答なし
回答数	887	161	7
割合	84.1%	15.3%	0.7%

出典：アンケート結果より筆者作成。

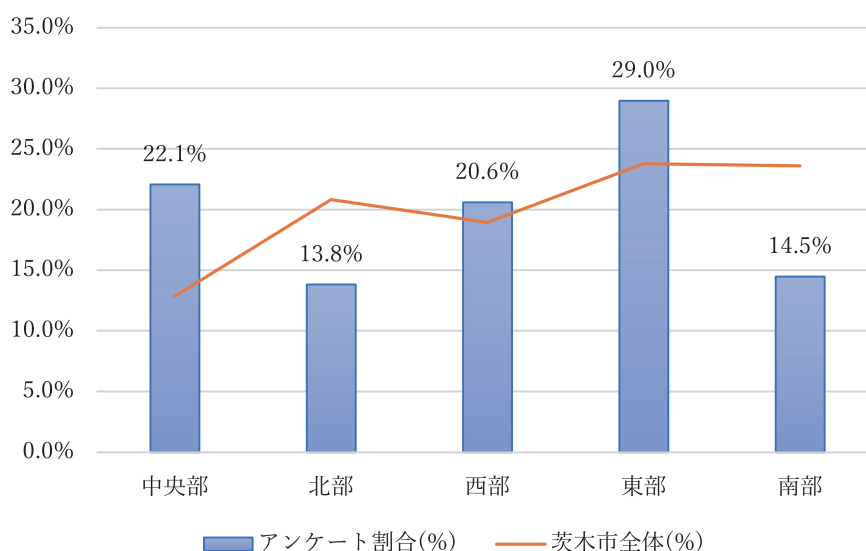


図1-3

出典：アンケート結果より筆者作成。

表3 茨木市の地域分け

地域	町字
中央部	岩倉町、永代町、駅前、大手町、小川町、春日、片桐町、上中条、下中条町、新庄町、新中条町、末広町、西駅前町、西中条町、東中条町、双葉町、舟木町、別院町、本町、宮元町、元町
北部	安威、栗生岩阪、泉原、五日市、五日市緑町、上野町、大岩、太田、太田東芝町、上音羽、上郡、清阪、車作、桑原、彩都あかね、彩都あさぎ、彩都はなだ、彩都もえぎ、彩都やまぶき、佐保、清水、下井町、下音羽、宿久庄、生保、城の前町、銭原、千提寺、大門寺、高田町、十日市町、豊原町、中河原町、長谷、西安威西太田町、西河原北町、西福井、忍頂寺、花園、東安威、東太田、東福井、福井、藤の里、南安威、南耳原、耳原、室山、安元、山手台、山手台新町、山手台東町
西部	井口台、上穂積、上穂東町、北春日丘、郡、郡山、道祖本、紫明園、下穂積、宿川原町、新郡山、豊川、中穂積、西田中町、西豊川町、西穂積町、畑田町、穂積台、松ヶ本町、松下町、見付山、南春日丘、南清水町、美穂ヶ丘
東部	鮎川、主原町、五十鈴町、稲葉町、大池、大住町、学園町、学園南町、上泉町、桑田町、庄、白川、新堂、総持寺、総持寺駅前町、総持寺台、園田町、大同町、竹橋町、田中町、寺田町、東宮町、戸伏町、中総持寺町、中津町、中村町、西河原、橋の内、星見町、三咲町、三島丘、三島町
南部	丑寅、宇野辺、蔵垣内、小柳町、沢良宜西、沢良宜浜、沢良宜東町、島、新和町、大正町、高浜町、玉櫛、玉島、玉島台、玉瀬町、玉水町、天王、並木町、奈良町、野々宮、東宇野辺町、東奈良、東野々宮町、平田、平田台、真砂、真砂玉島台、美沢町、水尾、南目垣、宮島、目垣、横江、若草町、若園町

出典：茨木市産業情報サイトあい・きゃっち「地域分けについて」。

表4 茨木市以外のアンケート回答者数と割合

	高槻市	吹田市	大阪市	摂津市	箕面市	他(4人以下)
回答数	37	37	23	17	7	40
割合	23.0%	23.0%	14.3%	10.6%	4.3%	24.8%

出典：アンケート結果より筆者作成。

2. 【質問1】あなたが普段よく利用する鉄道(モノレールを含む)の最寄り駅はどこですか？(複数回答可)

アンケート回答者の最寄り駅は、図2-1のように「JR茨木駅」と回答した人が最も多く、45.4%を占めた。次に多いのが「阪急茨木市駅」で35.3%であった。この結果については、昨年と大きな変化はない。

昨年は、最寄り駅として複数の選択肢を選ぶ人が多いことを指摘したが、今回は2駅を選択した人に注目した。表6によると、最寄り駅を2つ選択した回答者は164人であり、最も多かった組み合わせは「JR茨木駅」と「阪急茨木市駅」であった(表7)。この組み合わせは、双方の中間地点に住む人々が選択した可能性もあるが、回答者115人のうち中央部に住む人は25人であった。そのため、住んでいる場所よりも行き先によって路線を使い分ける人が多いことが示唆される。

また、図2-2は2022年から2024年の3年間(2022年のみ乗降客数の多い駅に絞って選択肢を用意)の推移データである。全体の傾向は変わらないものの、「阪急茨木市駅」と「JR総持寺駅」の利用者は増加傾向にある。「JR総持寺駅」の増加は、周辺の人口増加が要因と考えられる。しかし、「阪急茨木市駅」の利用増加については、周辺の人口増加とは関係が薄い。

茨木市では阪急バスと近鉄バスが運行されているが、阪急総持寺駅を経由する路線はない。一方、JR総持寺駅については、近鉄バスが経由しているものの、阪急茨木市駅と花園東和苑を結ぶ路線である。そのため、JR総持寺駅ではなく、阪急茨木市駅の利用者が増加した要因はバス路線の影響ではないかと考えられる。

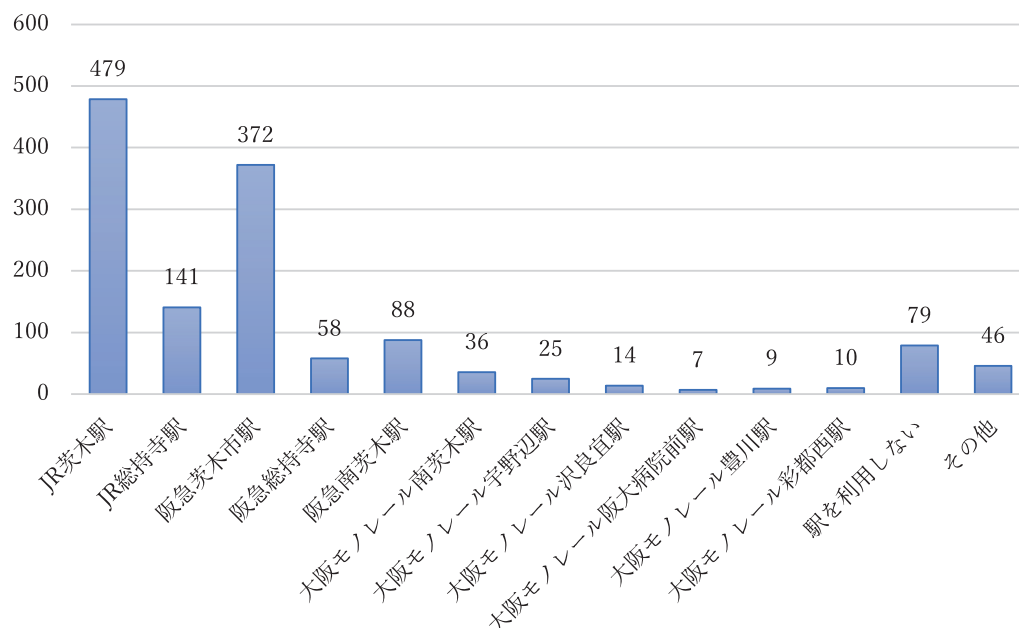


図 2-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

表 5

選択数	回答者数
1 個	829
2 個	164
3 個	45
4 個	13
5 個	4

出典：アンケート結果より筆者作成。

表 6 最寄り駅を 2 個回答した人が選択した駅の組み合わせ

駅の組み合わせ		回答数
JR茨木駅	阪急茨木市駅	115
JR総持寺駅	阪急総持寺駅	15
JR茨木駅	阪急南茨木駅	12
JR総持寺駅	阪急茨木市駅	11
JR茨木駅	大阪モノレール宇野辺駅	9
JR茨木駅	JR総持寺駅	7
阪急茨木市駅	阪急総持寺駅	7
阪急茨木市駅	阪急南茨木駅	5
阪急南茨木駅	大阪モノレール南茨木駅	5

出典：アンケート結果より筆者作成。

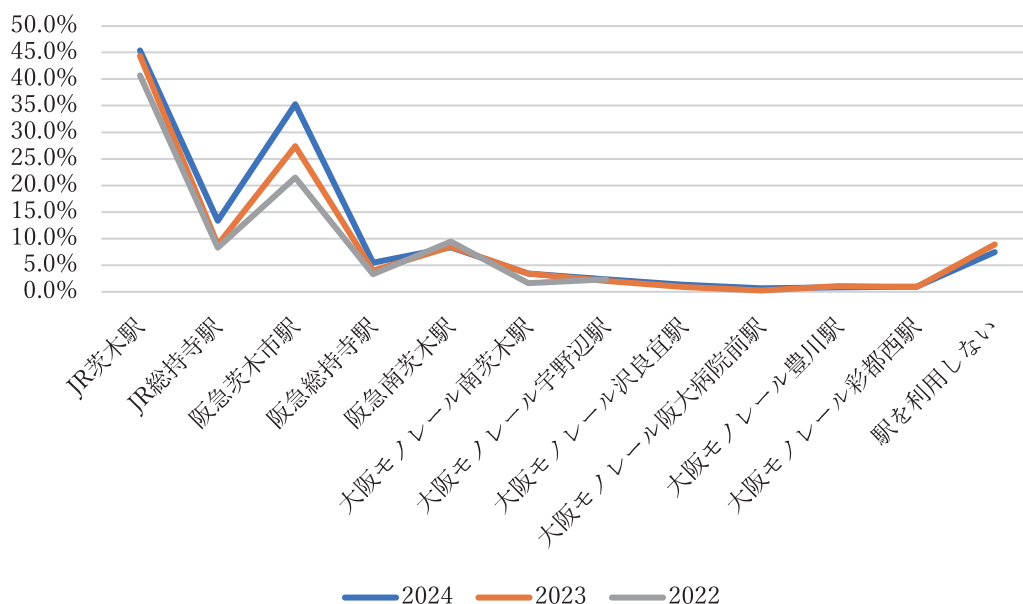


図 2 - 2

出典：アンケート結果より筆者作成。

3. 【質問2】最寄り駅を利用する目的は何ですか？(複数回答可)

最寄り駅を利用する目的としては、通勤・通学が最も多く、38.9%の人が選択した。次に多かったのは市外への移動で34.3%であった。

この質問の3年間の変化を示した図3-2を見ると、全体の傾向はほぼ同じだが、市外への移動が年々増加傾向にあることが注目される。これは、新型コロナウイルスが第5類に移行されたことで、人々の行動範囲が広がった結果と考えられる。

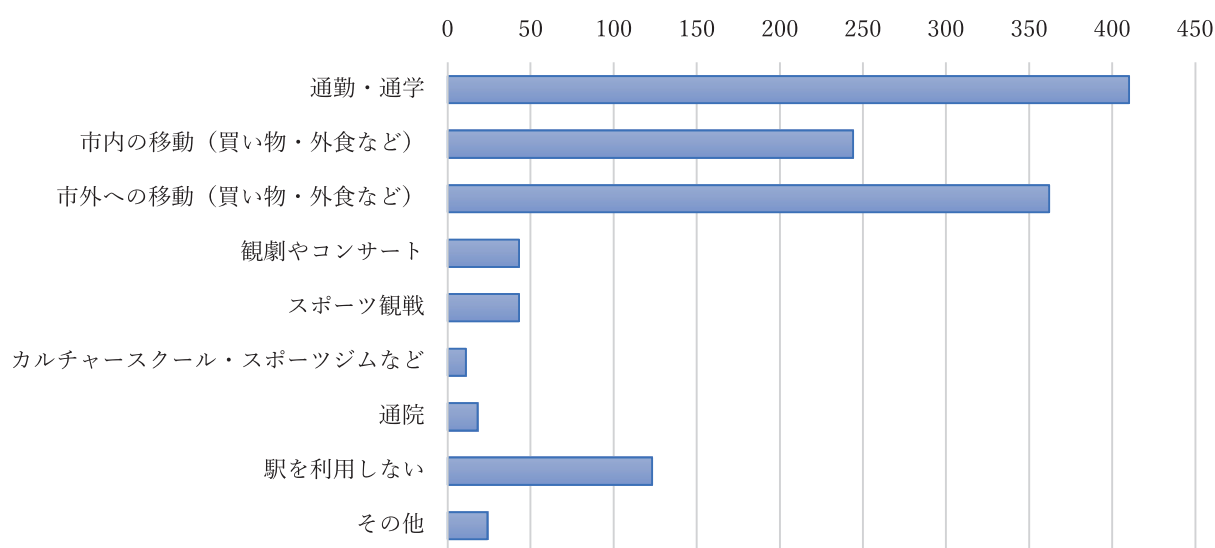


図 3 - 1

出典：アンケート結果より筆者作成。

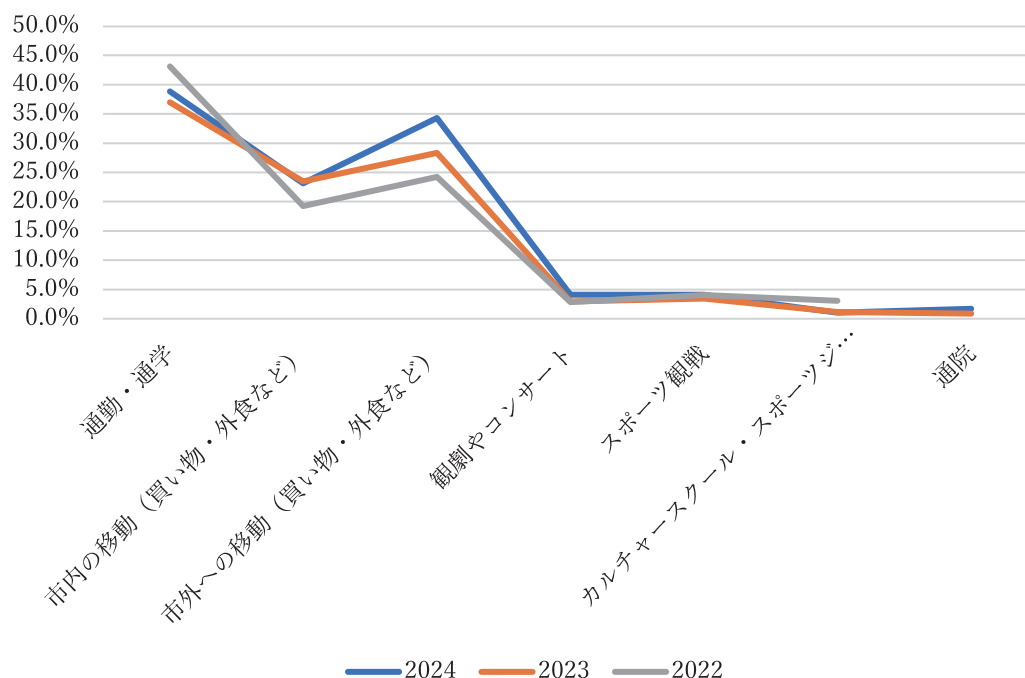


図3-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

4. 【質問3】よく利用する駅周辺に不足していると思う施設・お店は何ですか？（複数回答可）

「よく利用する駅周辺に不足していると思う施設・店舗」を尋ねた質問では、駐車・駐輪場と回答した人が最も多く、31.1%であった。次に多かったのはカフェ・

レストラン（22.6%）、その後にスーパー（21.0%）が続いた。

図4-2では、昨年の結果と比較しているが、全体の回答傾向はほぼ同じであり、特に大きな変化は見られなかった。

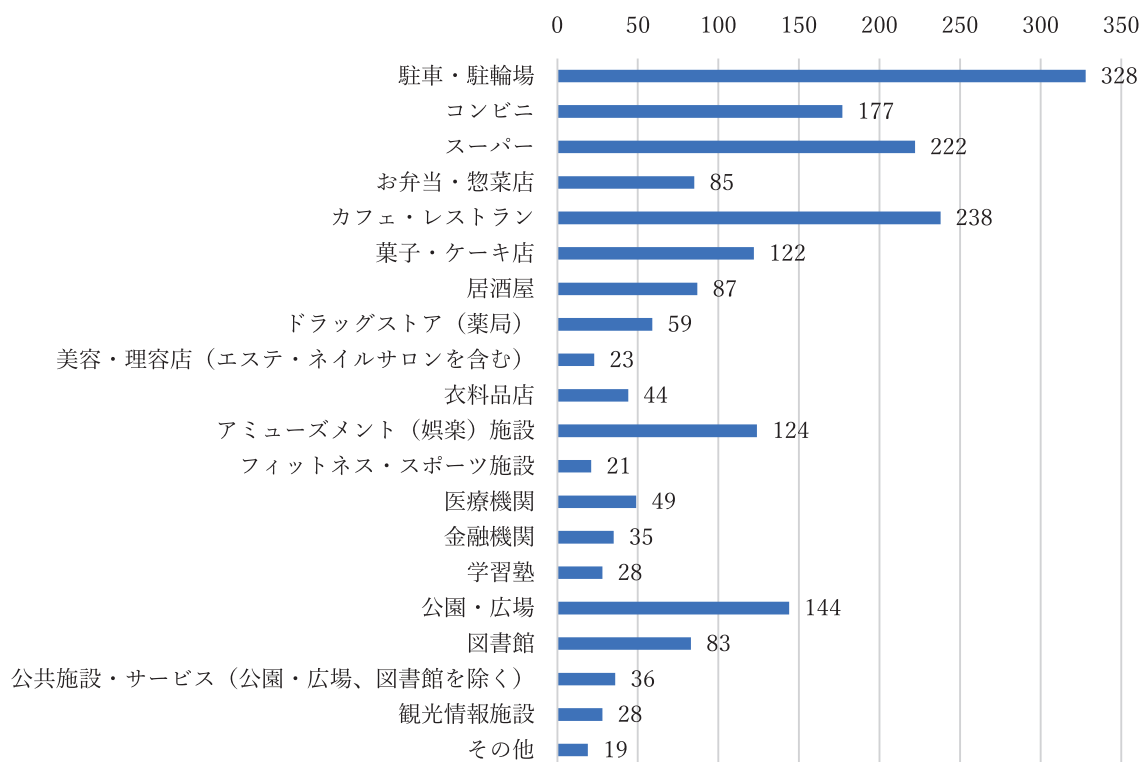


図 4-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

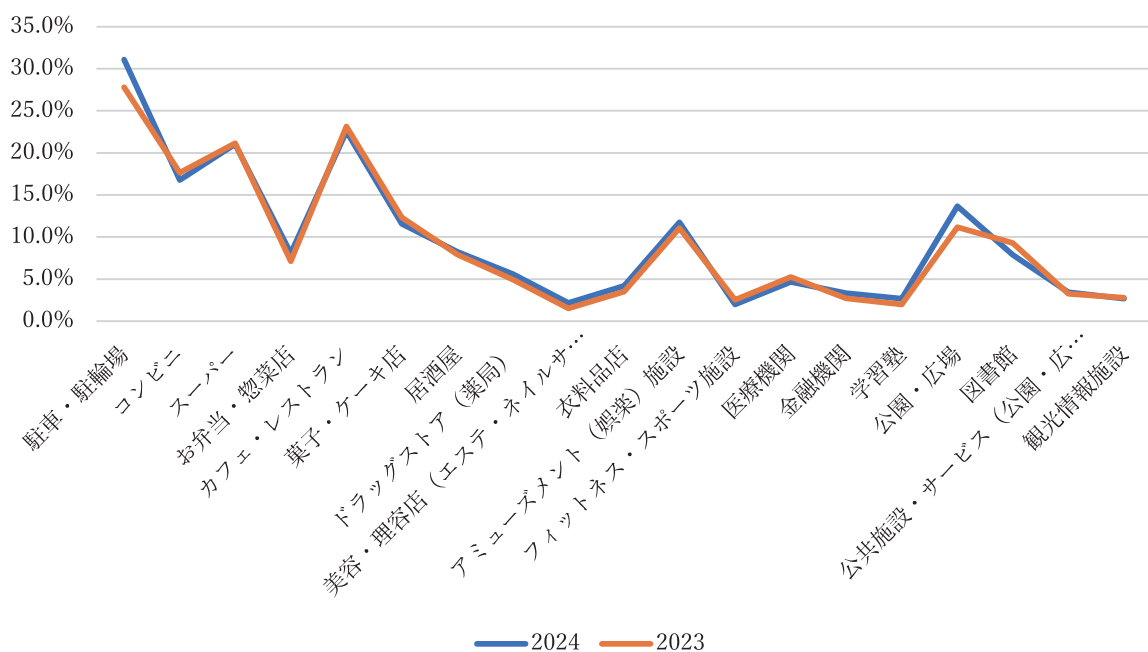


図 4-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

5. 【質問4】茨木市内での移動に利用・使用する交通手段を教えてください。（複数回答可）

茨木市内で主に利用する交通手段を尋ねたところ、最も多かったのは自転車で60.9%、次いで自家用車が42.3%であった。

エリアごとの交通手段については、図5のように中

央部と北部以外の地域では比較的近い傾向が見られる。中央部では自家用車やバスの利用者が少なく、一方で北部では自家用車やバスの利用者が多く、自転車や徒歩の利用者が少ないという傾向が明確に表れている。

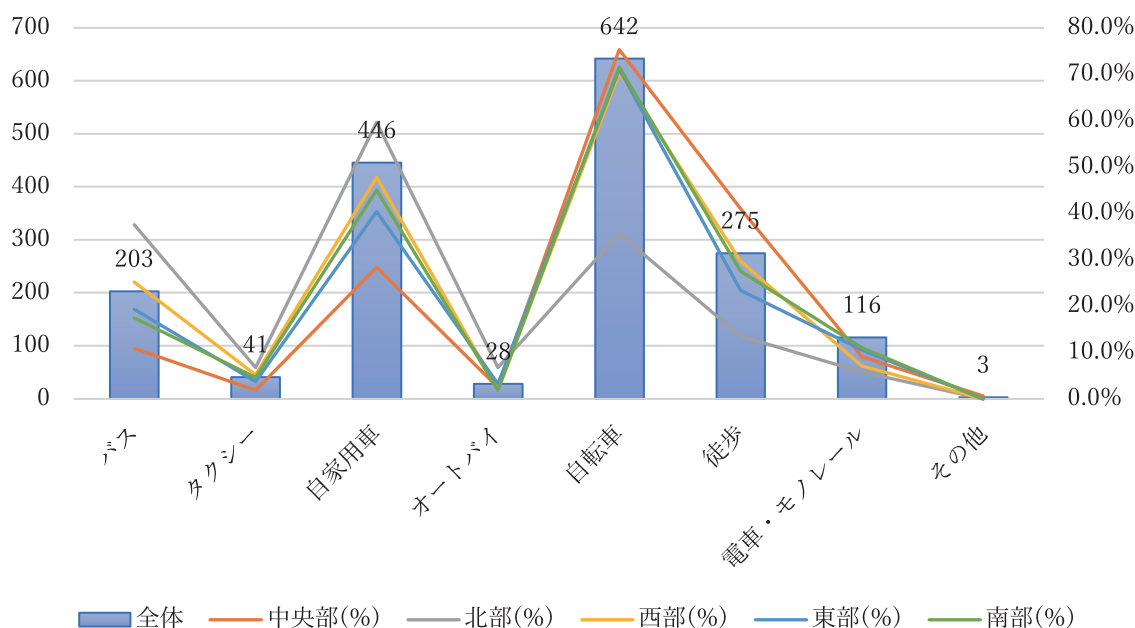


図5

出典：アンケート結果より筆者作成。

6. 【質問5】昨年11月26日にオープンした「おにクル」を利用したことはありますか？利用したことがある場合はその頻度を教えてください。

この質問では、「おにクル」の利用の有無と、利用している場合の頻度を一度に回答してもらっている。しかし、頻度を含めたグラフでは利用の有無の割合がわかりにくいので、まずは図6-1のように利用の有無に絞って分析する。

「おにクル」の利用状況について、全体では「利用したことがある」と回答した割合が81.8%、「利用したことがない」と回答した割合が21.6%であった。市内在住者に限定すると、利用経験があると回答した割合は88.2%に上昇する。一方、市外在住者で利用経験があると回答したのは47.2%である。全体および市内在住者の利用割合が高いため、市外在住者の利用割合が相対的に低く見えるが、市外在住者の約半数が利用した

ことがあるというのは、茨木フェスティバルで実施したアンケートであることを考慮しても高い結果と言える。

次に、利用の有無に利用頻度を合わせたものが図6-2である。全体で1回だけ利用したことがあるとの回答は20.2%、2回以上、月1回未満と回答したのは、29.9%、2回以上、月1回程度は21.5%、2回以上、週2回以上は10.2%であった。図6-2では、市内在住者、市外在住者、女性、男性ごとの結果を併せて表示している。市内在住者では、2回以上利用したことがあるという回答が約3人に2人、月1回以上利用する人も約3人に1人である。また、性別ごとに見ると、男性よりも女性の方が利用頻度が高いことがわかった。

図6-3では、市内在住者の回答を地域ごとに分けている。この図で特に注目すべき点は、中央部の在住

者の利用割合が低いことである。「おにクル」は中央部に位置する施設であり、本来であれば施設との距離が利用しやすさに影響を与えると考えられる。しかし、実際の結果はそうっておらず、この要因を考える必要がある。

この結果の要因として、アンケート回答者の地域ごとの年齢分布が関係している可能性がある。年齢の回答は9歳以下、10歳台、20歳台、30歳台、40歳台、50

歳台、60歳台、70歳以上の区分であり、計算のために各年齢層の中央値を設定し、平均年齢を算出した。結果は以下の通りである。中央部の平均は34.6歳、北部の平均は31.1歳、西部の平均は32.8歳、東部の平均は34.4歳、南部の平均は33.7歳となる。この平均年齢を踏まえて図6-3を確認すると、「おにクル」の利用の有無およびその頻度が地域の年齢層と関係しているように見える。

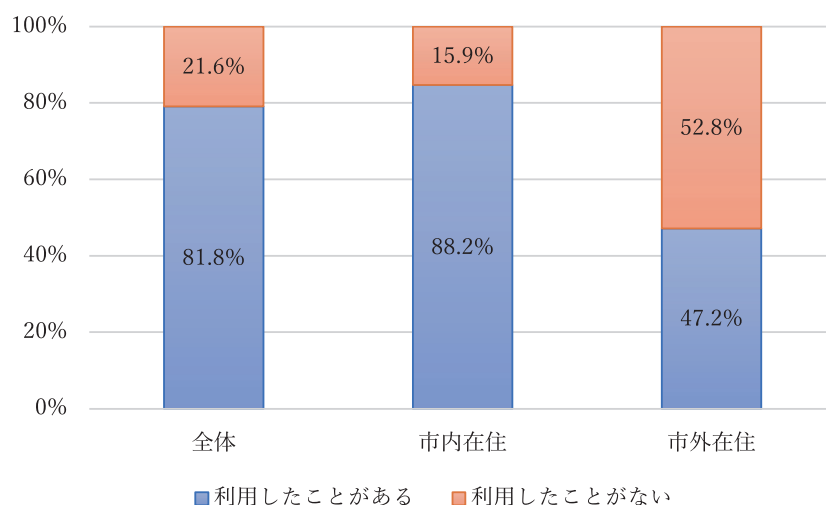


図6-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

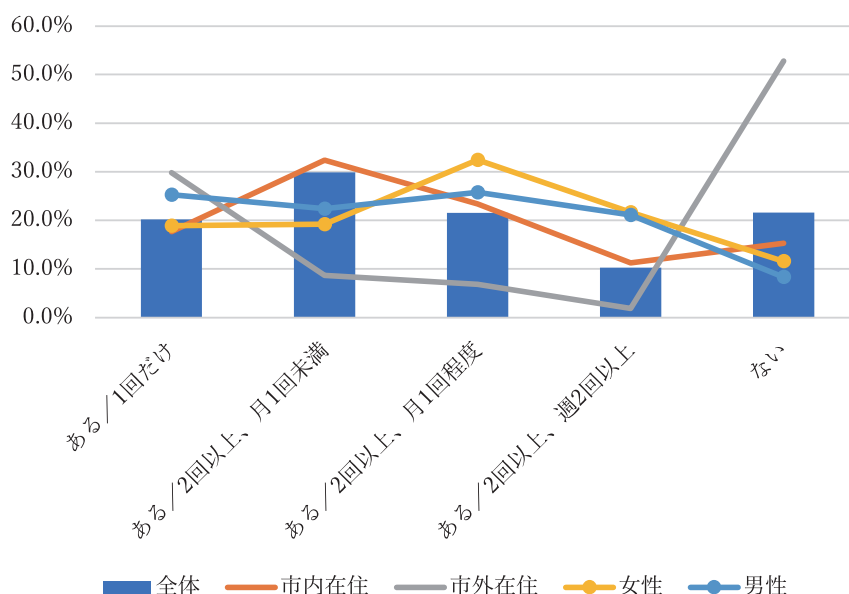


図6-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

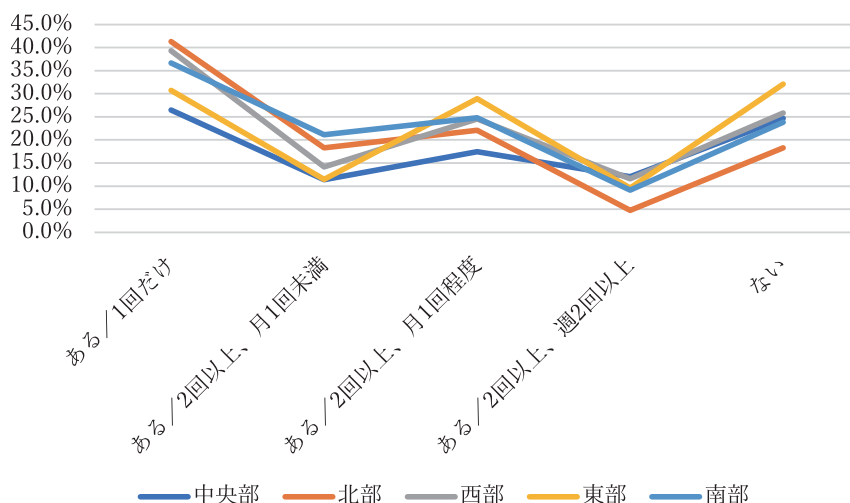


図6-3

出典：アンケート結果より筆者作成。

7. 【質問6】「おにクル」を利用した方にお尋ねします。来られる際の交通手段を教えてください。（複数回答可）

「おにクル」の利用者の交通手段についての質問では、自転車が多く、回答割合は50.7%であった。次いで自動車が多く、25.1%の割合である（図7-1）。この結果は【質問4】の茨木市内での交通手段を尋ねた質問の結果とほぼ同様である。また、図7-1では

女性と男性の回答を分けて表示しているが、自動車に関しては女性の方がやや多いものの、その他の移動手段については性別による大きな差は見られなかった。

図7-2では「おにクル」の利用者の交通手段を地域ごとに分析している。この結果を見ると、【質問4】とは異なり、南部在住者が徒歩を選択した割合が高いことが顕著である。

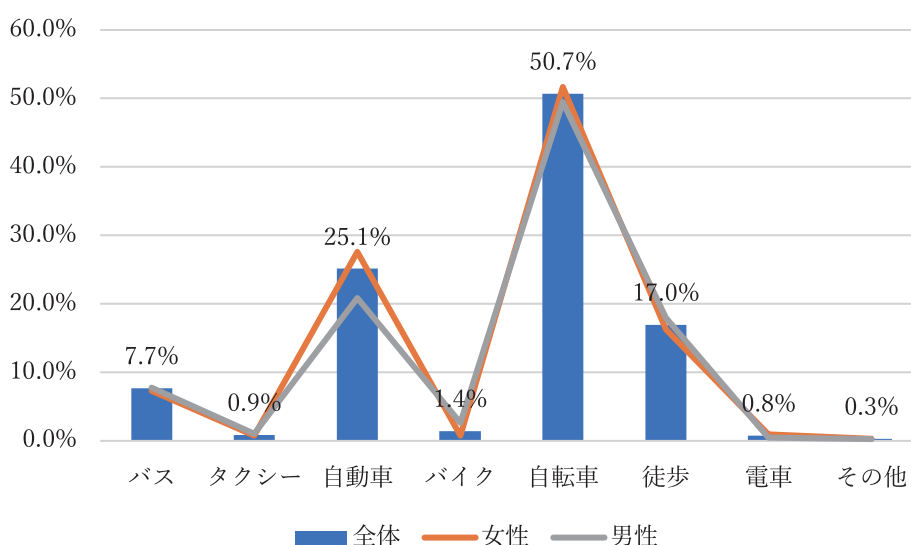


図7-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

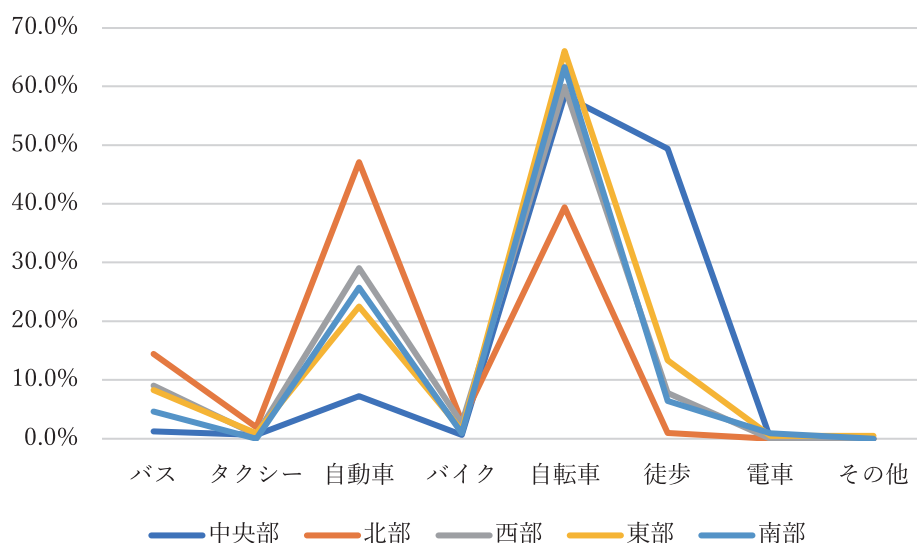


図7-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

8. 【質問7】「おにクル」を利用した方にお尋ねします。「おにクル」に不足していると思う施設・サービスはありますか？（複数回答可）

「おにクル」の利用者に対し、不足していると感じる施設やサービスについて尋ねたところ、最も多かった回答は「飲食店」で、全体の37.3%を占めた。次いで「コンビニ」が30.8%となっている。また、4番目に多い

回答として「飲食スペース」（17.0%）が挙げられており、飲食や軽食に関する不満の声が目立っている。不足を感じる人が多い一方で、飲食・軽食の需要が高いということは、それだけ長時間滞在する利用者が多いことの表れではないだろうか。「おにクル」周辺には飲食店やコンビニもあるが、施設内で快適に過ごせるよう、さらなる工夫が求められる。

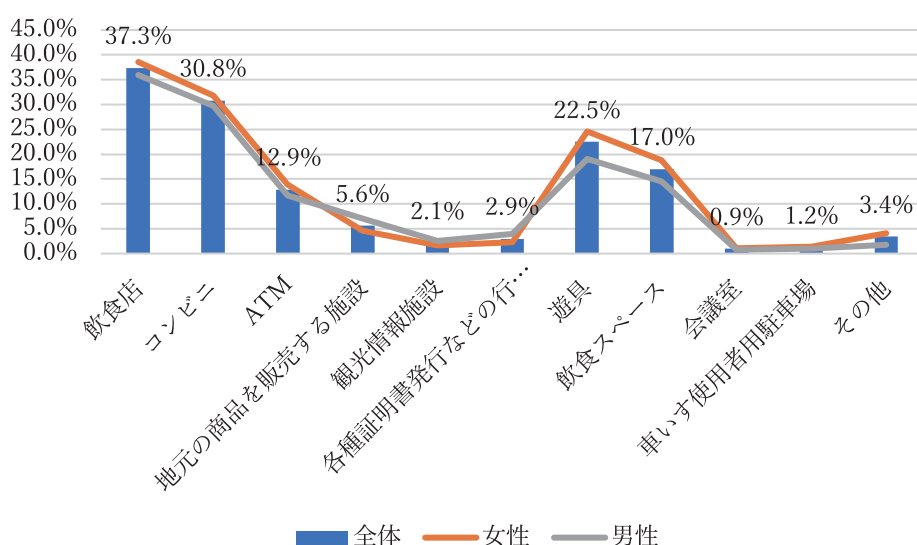


図8-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

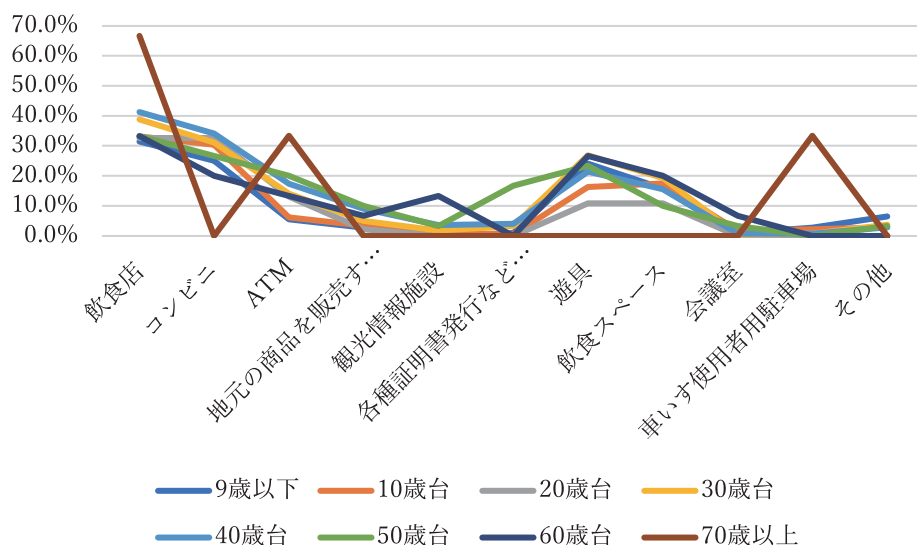


図8-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

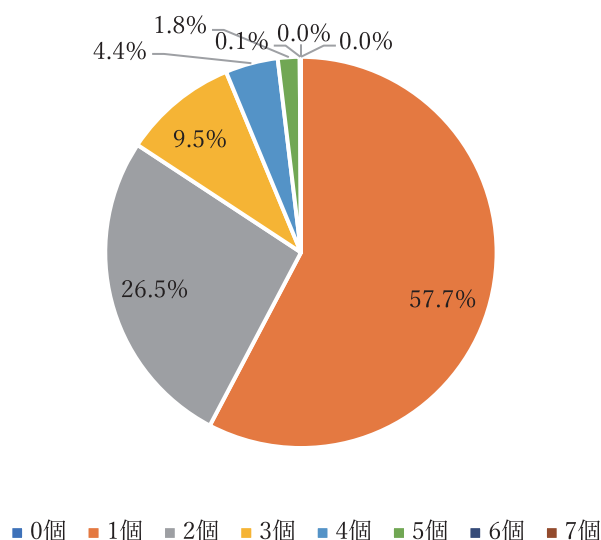


図8-3

出典：アンケート結果より筆者作成。

9. 【質問8】 今年の4月23日に一部オープンした安威川ダム周辺に整備中の公園「ダムパークいばきた」を知っていますか？知っている場合は何で知りましたか？（複数回答可）

この質問は、「ダムパークいばきた」の知名度に関するもので、【質問5】と同様に、一度の回答で二つの質問に答える形式となっている。具体的には、知っているかどうかに加え、知っている人にはその経路も尋ね

ている。まずは経路に関する回答を除き、知名度のみを見ていくと、「知っている」と回答した人は全体の65.1%、「知らない」と回答した人は34.0%であり、約3分の2の人が「ダムパークいばきた」の存在を認知していた。さらに、市内在住者に限ると「知っている」と答えた人の割合は70.2%と、より高い結果となった。

昨年の茨木フェスティバル「茨木の交通と暮らし」アンケート（葉山ら、2024）では、「おにクル」の開

業前の知名度について調査を行い、その結果、全体で64.8%、市内在住者では73.4%が「知っている」と回答していた。全体ではわずかに「ダムパークいばきた」の方が認知度が高いが、市内在住者に限ると「おにクル」の方が高い結果となっている。

次に、「知っている」と回答した人を対象に経路を含めた結果を見ると（図9-2）、「広報いばらきで知った」と回答した人の割合が最も高く、全体の43.3%を占めていた。さらに、「知っている」と回答した人に限定すると、この割合は66.5%に達する。昨年のアンケー

ト（葉山ら、2024）でも広報いばらきの影響力の高さが指摘されていたが、今回の結果もそれを裏付けるものとなった。自治体が発信する媒体の地域情報における影響力の大きさが改めて確認されたといえる。

ただし、図9-2の結果を見ると、回答の順序によるバイアスが生じている可能性も考えられる。そのため、次年度以降に同様の質問を実施する際は、バイアスの影響を評価できるような工夫を施すことが望ましい。

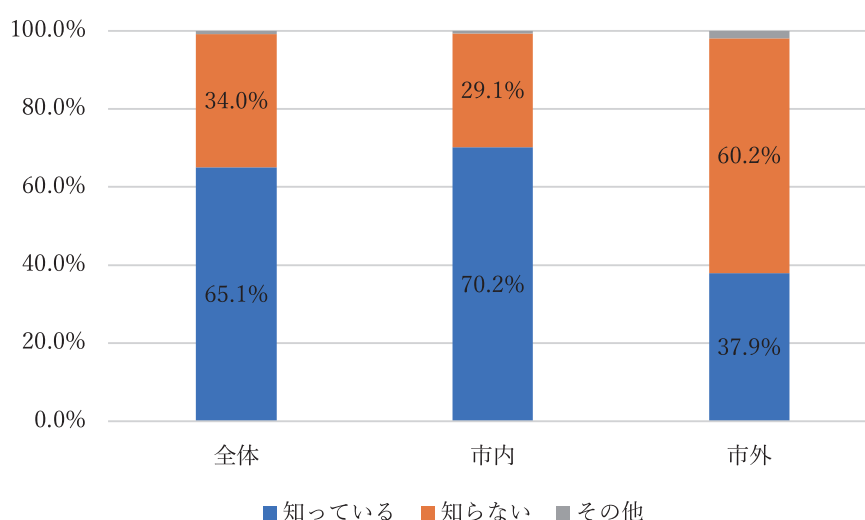


図9-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

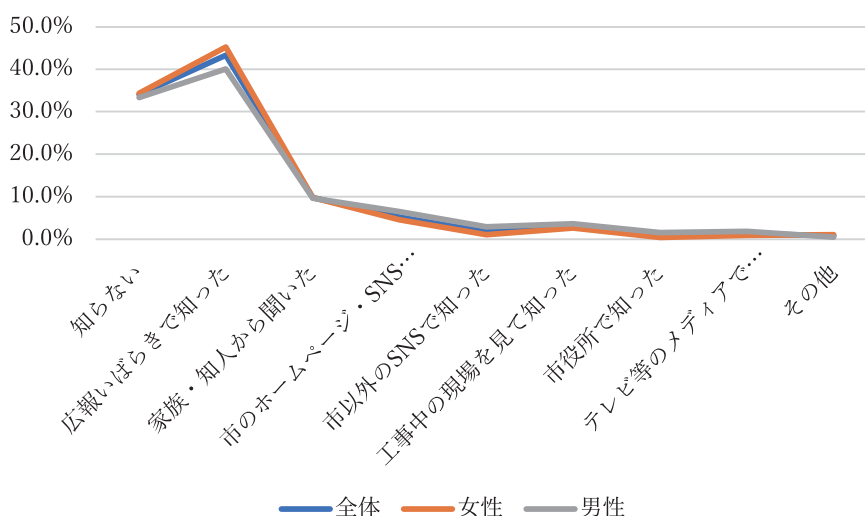


図9-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

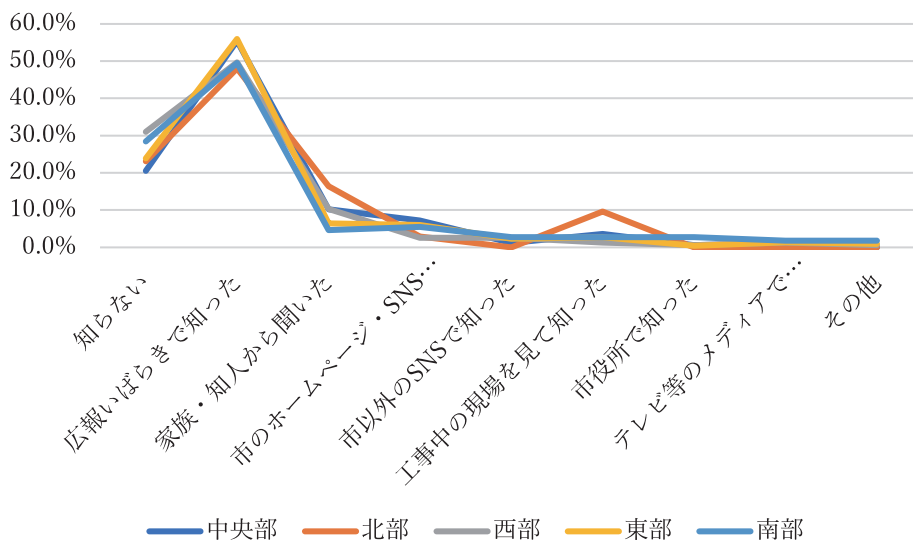


図9-3

出典：アンケート結果より筆者作成。

10. 【質問9】「ダムパークいばきた」では各種イベントが可能なステージなどがある広場エリアがオープンしていますが、どんなイベントを期待しますか？（複数回答可）

「ダムパークいばきた」の広場エリアでの開催が期待されるイベントについて尋ねたところ、最も多かった回答は「体験型イベント」で、全体の45.9%を占めた。

次いで「音楽イベント」が38.3%となっている。

図10-2は年齢別の回答を示しているが、特に回答数の多かった「体験型イベント」には年齢層ごとのばらつきが見られる。40代、9歳未満、30代の順に割合が高く、子育て世代の親子を対象とした体験型イベントの需要が特に高いことが推測される。

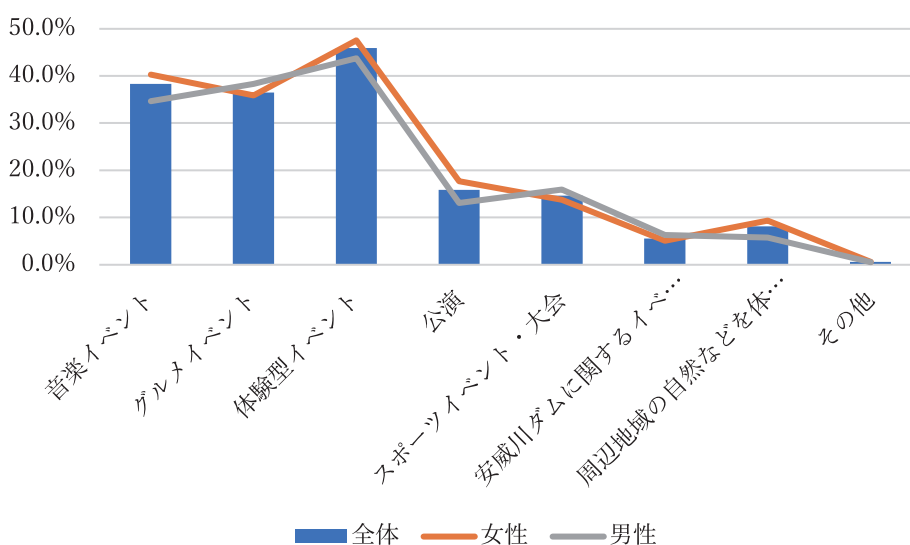


図10-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

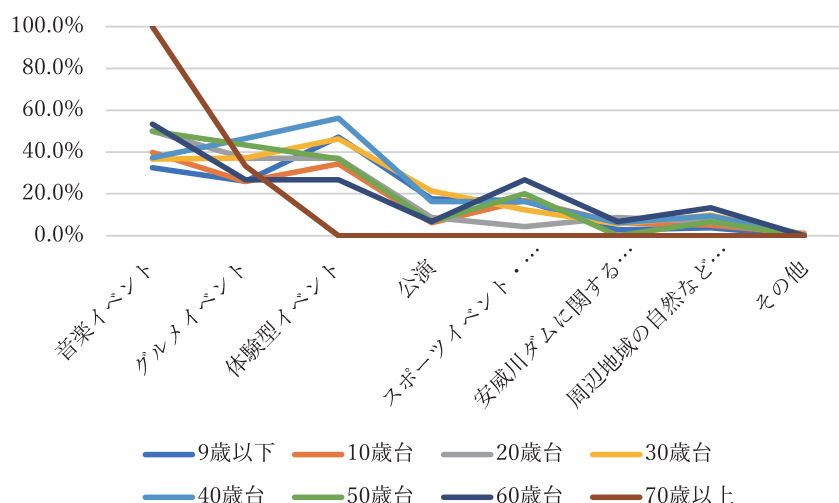


図10-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

11. 【質問10】「ダムパークいばきた」には今後、次の施設ができる予定です。どれを利用したいですか？（複数回答可）

「ダムパークいばきた」に新設予定の施設について、どれを利用したいかを尋ねたところ、最も多かった回答は「吊り橋エリア」で、全体の51.7%を占めた。次いで「BBQ施設」が51.1%と僅差で続き、いずれも過半数の人が利用を希望しており、高い人気がうかがえる（図11-1）。

また、男女別の回答も示しているが、性別による顕著な差は見られなかった。さらに、各施設がどの世代に人気があるかを把握するため、図11-2では世代別の結果を示している。大きな違いは見られないものの、20代から40代の子育て世代では「BBQ施設」の人气が高く、それ以外の年齢層では「吊り橋エリア」がより支持されている。この傾向から、ファミリー利用を想定する人が多い年代と、個人利用を想定する人が多い年代で、関心のある施設が分かれることが考えられる。

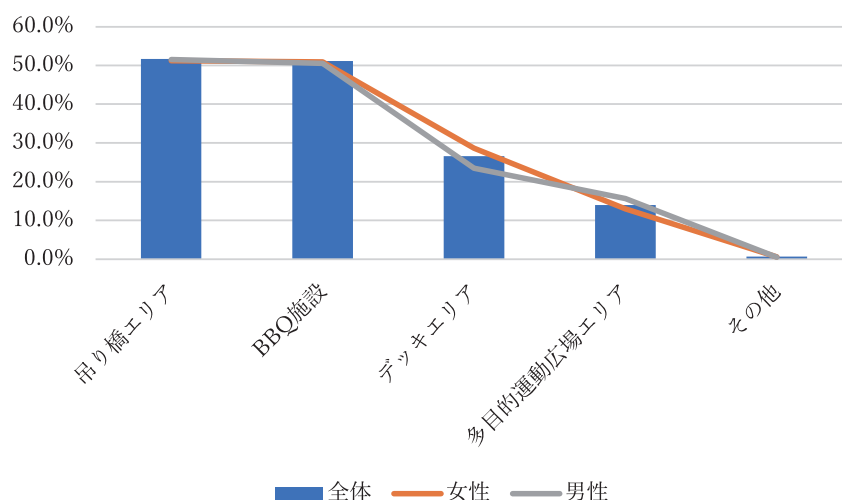


図11-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

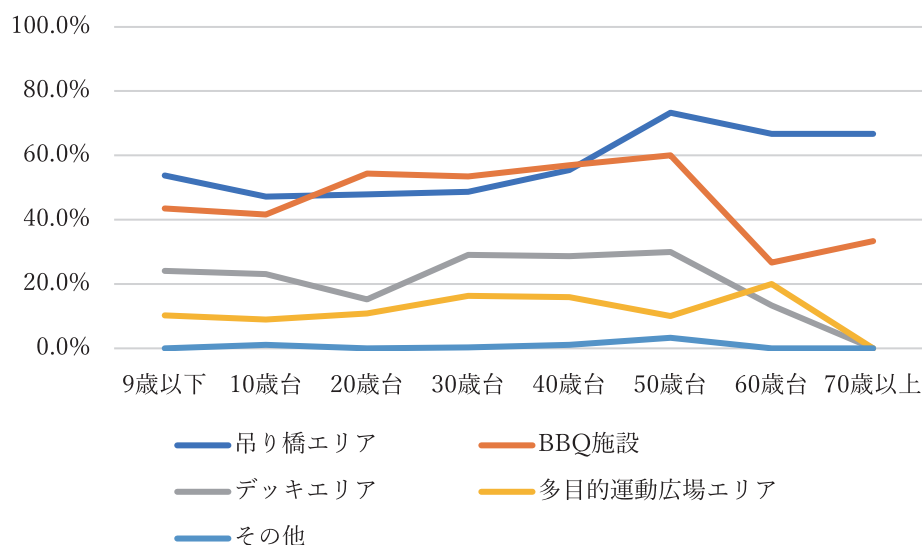


図11-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

12. 【質問11】 その他「茨木の交通と暮らし」についてご意見があればご記入ください。

アンケートの最後は「茨木の交通と暮らし」に関する意見を自由記述で尋ねた設問である。回答数は83件で、全体の7.9%に相当する。記入内容の傾向を把握するため、「好意的」「要望・批判」「特になし」「除外」の4つのカテゴリに分類した。

「好意的」な意見では、「暮らしやすい」「居心地がいい」など、茨木市の住環境の良さを評価する声が多

かった。一方、「要望・批判」に該当する意見では、昨年までのアンケート結果と同様、交通に関するものが多数を占めた。特に今年のアンケートでは、自転車に関する意見が目立ち、「駐輪場」や「自転車専用レーン」の整備を求める声が多く寄せられた。

そのほか、「渋滞」や「バス」に関する意見も多く見られた。渋滞については、茨木市中心部の混雑緩和を求める声が多く、バスについては路線や停留所の拡充を希望する意見が目立った。

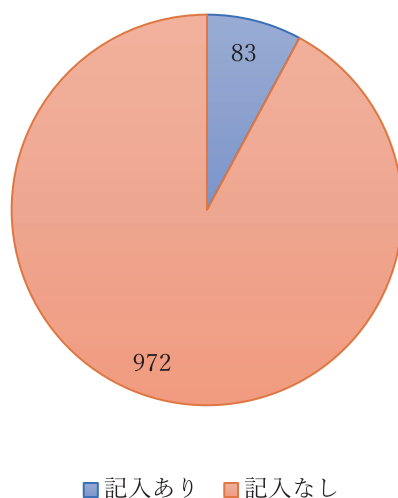


図12-1

出典：アンケート結果より筆者作成。

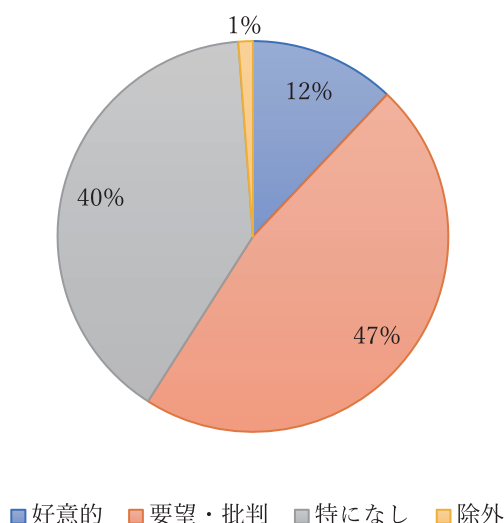


図12-2

出典：アンケート結果より筆者作成。

おわりに

基本情報に関する質問項目では、2023年のアンケート結果で目立っていた9歳未満、10歳台の増加について、新型コロナウイルスが第5類に移行したことにより、これまで外出を控えていた9歳未満、10歳台がイベント等に出かけられるようになった。その影響から増加している可能性について考察していたが、2024年は、9歳未満、10歳台の回答者数は以前と同等の水準にまで戻っている。しかし、2024年のアンケート結果で確認できたのは、市外への移動が年々増加傾向になっていることである。このことは、昨年同様新型コロナウイルスに関する影響である可能性が高いように考えている。人々の行動範囲が広がっていると感じさせる結果であった。

そして、茨木市内の変化としては、JR総持寺駅の開業に関連した周辺地域の人口増加に関連していると考えられる変化も確認できた。また、この地域の人口増が阪急茨木市駅の利用者増にも関連している可能性について言及しているが、これはあくまでも阪急総持寺駅までの距離とバスのルートを考慮した推測であるため、2025年のアンケートで可能であれば、この点を明らかにできるような質問を盛り込みたい。

「おにクル」に関する質問項目では、継続的、定期的に訪れる利用者が目立っていることが確認できた。同施設は開館から194日目に来館者数100万人を突破したと発表されており、多くの人から施設に対する利用価

値を評価されているものと考えられる。しかし、アンケートでは飲食に関する要望が目立った。施設には一定時間滞在することから、要望に対する対応がなされることを望みたい。

「ダムパークいばきた」に関する質問項目では、2023年のアンケートで「おにクル」の知名度調査をした結果と同様に「広報いばらき」の効果が明らかになった。そして、「ダムパークいばきた」自体については新しい施設への期待の高さが窺える結果であった。現在は一部が開業している状態で、全面オープンは2025年の予定であるが、「おにクル」同様に茨木市の新たな名所になることが大いに期待される。

最後に、今年はアンケートの最後の方の設問に、回答が選択肢の前の方を選択する人が多く、順番が後ろになるにつれ減少する傾向が続けて見られた。この「茨木の交通と暮らし」のアンケートでは毎年多くの人に回答を協力してもらっている。無効回答になるような回答はほとんどなく、また、回答必須ではない自由記述欄にも「特になし」とわざわざ記入してくれる人が多いため、順序バイアスの可能性は低いのかもしいが、2025年に実施する際には、適切な設問数と選択肢の並び順・解答方法を見直して実施し、よりの確な結果を示すことができるようにしたい。

参考文献

葉山幹恭、宮崎崇将、村上善郁（2022）「〈調査報告〉

2022年度 茨木フェスティバル「茨木の交通と暮らし」
アンケート結果分析『追手門学院大学ベンチャービ
ジネス・レビュー特別号』

葉山幹恭、宮崎崇将、村上善郁（2024）「〈調査報告〉
追手門学院大学ベンチャービジネス研究所・茨木

商工会議所商業部会共同調査 2023年度 茨木フェス
ティバル「茨木の交通と暮らし」アンケート結果分
析『追手門学院大学ベンチャービジネス・レビュー
特別号』